埋文とやま

Toyama Prefectural Center for Archaeological Operations

2006.3.20
VOL 94

縄文中期の台付鉢形土器。口縁部を形どる波のうねりと胴部を引き締める腰のくびれが、曲線の美しさを際立たせる。華やかな渦巻き紋の衣服をまとった女性を思い起こさせる。
朝日町境A遺跡出土　　重要文化財

連載企画●とやま発掘物語4
とっておき埋文講座●富山の発掘八十年
埋文あらかると●中世城館遺跡 総合調査を終えて
Center Flash●催しガイド2006
行ってこられよ●魚津歴史民俗博物館

富山県埋蔵文化財センター

連載企画

とやま発掘物語④

小杉流団No.16遺跡 －射水丘陵の古代生産遺跡－

里山風景

北陸自動車道を小杉インターチェンジで降りると、すぐ近くに小杉流通センターがある。流通・卸売業などが集中する県内有数の企業団地である。

開発に先立って遺跡の有無を確かめるために、この地に初めて足を踏み入れたのは昭和51年の冬のこと。入組んだ谷間には水田や潅漑用の溜池、緩やかな起伏の丘陵には畑、竹林、雑木林などが広がる典型的な里山風景をみせていた。

発掘調査

富山県によって流通業務団地造成の計画が進められ、これに伴う発掘調査は翌昭和52年度から始まった。後に小杉丸山遺跡と命名されたNo. 21遺跡の試掘調査をかわきりに、平成６年度の No. 15Ａ遺跡まで、旧石器時代から中世に及ぶ26か所の遺跡を18年にわたって調査した。

発掘調査によってさまざまな成果が得られたが、特徴的なのは古代の生産関係遺跡。飛鳥～平安時代の須恵器窯跡や製鉄遺跡がこの丘陵地帯に集中しており、まさに古代の工業団地ともいうべき姿を現わした。

計画変更で発掘することに

昭和54年には No. 16遺跡の西半分が発掘調査され、須恵器の窯跡２基と住居跡、作業場とみられる段状の遺構、粘土採掘穴などが発見された。

昭和58年の夏に行われた第６次の発掘調査では、当初緑地帯で保存される予定であった No. 16遺跡の東半分も計画変更に伴って本調査を行うことになった。ここに紹介するのは、その東半分の発掘成果である。事前の試掘調査では、須恵器の窯跡の存在が確認されていた。

須恵器窯跡の出現

丘陵斜面の表土を除去すると、黄褐色の地山に黒色の土が詰まった溝状の遺構が確認された。溝に沿って真っ赤に焼けた壁が顔を出し、斜面の下方には灰原とか物原と呼ばれている須恵器失敗品の堆積がみられた。典型的な須恵器の窯跡だ。発掘を進めるにつれて徐々にその全貌が明らかになっていった。

窯は、幅が約1.1メートル、長さ約10メートルの大きさで、この時代に特有なトンネル状の登り窯である。窯底の傾斜度が約24度。窯内部に入るとかなり急な感じである。窯の焚(た)き口に当たる部分では浅い楕円形の穴が掘られ、傾斜は緩やかになる。壁は何層にも赤く焼けた跡を残していて、補修しながら何度も須恵器を焼いたことが窺えた。天井部分はすべて崩れ落ちていた。

No.16遺跡全景

第１号窯跡

工人集落

窯跡の横の斜面には地山を掘り込んで平坦な面を造成し、内部には柱穴が並ぶ遺構が数か所発見された。住居跡か作業場と考えられる。従来は窯跡のみが発掘される例が多かったが、この流通団地内の遺跡群では、須恵器や製鉄の遺構の周辺に、生産にあたった工人たちの住居群や作業場が合わせて発見されることが多く、NO. 16遺跡もその例にもれない。

さらにすぐ側には焼物用の粘土を採掘したとみられる大きな穴がいくつも発見された。射水丘陵とその周辺では今でも瓦生産が盛んであることから判るように焼物に適した粘土が堆積している。古代の須恵器生産も原材料である粘土と燃料となる雑木が豊富な丘陵地帯に発達するのである。

遺物の出土状況

失敗品の山

窯で焼かれているうちに、ひび割れたり、歪んだりして焼成に失敗した須恵器は、窯の下方斜面に捨てられたため、層をなして堆積し、一部は谷底まで転げ落ちていた。相当な期間にわたって大量に製作されたことが推定でき、出土した須恵器の総量は整理箱に300個にもおよんだ。

失敗品は灰原ばかりではない。窯の内部を掘り進めると、崩れた天井や倒れた壁の下から生焼け状態の杯と呼ばれる椀状の器が重ねられた状態でたくさん出土した。中には細かく割れているものもある。

おそらくこの窯で最後に製作した際に、なんらかの原因で焼成に失敗し、商品価値のない杯は、取り出されることなく廃棄されたものであろう。失敗を嘆き、悔しがる工人達の姿が目に浮かぶ。

須恵器編年の基準に

灰原や谷部から出土した須恵器は、杯・杯蓋・高杯・壺・壺蓋・平瓶・横瓶・鉢・盤・甕・円面硯といった種類に大きく分けられ、壺はさらに短頸壺・長頸壺・広口壺・小型壺などに分類できる。No.16遺跡の須恵器は奈良時代にみられる全ての種類をほぼ網羅していることが分かった。

さらに形態の比較研究で、製作された時代が奈良時代の中頃、西暦740年前後であることや奈良の都で使用された須恵器とよく似通っていることもあきらかになった。そのため、現在では北陸の須恵器の編年（年代の物差し）を決める際の基準資料とみなされており重要性が増している。

多彩な出土遺物

その他の出土遺物の中にも注目されるものが少なくない。

「印仏」は、スタンプ状のもので、長さ6.4、幅4.5センチメートル。片面に仏像が印刻され、反対側には持ち手がつく。陶製の印仏はめずらしく、時代的にも最古の可能性が高い。「鳥形須恵器」は、水鳥をかたどったもので、球形の体部には羽を描きしっかりとした脚が付く。祭祀用の器と考えられるもので、頭部を意図的に打ち壊している。

線刻文字では「秦人」と読めるもの、墨書土器では「小橋寺」と記された須恵器の杯があり、陶製の印章や仏像の台座状のものも出土した。生産遺跡でありながら、仏教や寺院に関連しそうな遺物が目につく。生産母体や製品の供給先を考える際の手がかりになるかもしれない。

鳥形須恵器

なお谷部では、鋤（スコップ状の道具）、曲物の底板、舟形や刀形といった祭祀用具など、各種の木製品も出土した。鋤はおそらく粘土採掘に用いたものであろう。

昔の名前で出ています

小杉流通センター内の遺跡については、分布調査時の発見順に小杉流団 NO.1から NO.26まで仮の名称が付けられた。そのうちの No. 21遺跡は、国指定史跡になる時に「小杉丸山遺跡」という正式名称が付けられたが、それ以外はもとのままとなっている。No.16のように、これほど重要な遺跡が仮名称というのは気にはなるが、慣れ親しんで、いつの間にやら定着してしまった。遺跡名称を今さら変更するのもさびしい気がする。当分このままにしておこう。

（所長代理　山本　正敏）

出土した須恵器

印仏

●北陸本線小杉駅から車で15分
●北陸自動車道小杉I.Cから車で５分

富山の発掘八十年

とっておき埋文講座

富山市埋蔵文化財センター所長 **藤田 富士夫**
Fujita Fujio

はじめに

富山県の近代考古学は氷見市の大境洞窟遺跡の発掘に始まると言っても過言でありません。それから80有余年、いま富山県埋蔵文化財センターでは「発掘された日本列島2005　地域展－発掘された富山－」が開催〔2005年11月30日に終了〕され、今日の到達点を示しています。私の講演では、この間の発掘事情を紹介したいと思います(以下、敬称を略します)。

近代考古学への開眼

大正７(1918)年６月15日頃から氷見市の大境洞窟にある白山社の改築工事が始まりました。これに伴って多くの遺物が出土し、25日には氷見警察署の実地検分が行われました。27日の高岡新報に紹介され、７月１日の東京朝日新聞欄外記事に載りました。この記事を目にした東京帝国大学人類学教室助手の柴田常恵は、３日の夜行で富山へと向かっています。

柴田が大境洞窟に対して電光石火の行動をとった背景に、日本での人類起源問題があったと思います。当時の学界の関心事に旧石器人の存否問題がありました。今の私たちも、洞窟遺跡といえばヨーロッパの旧石器人の住まいを思い浮かべます。

柴田は、旧石器時代遺跡の可能性を期待したようです。このような動機があって、大境洞窟で日本最初となる洞穴遺跡の発掘が行われたようです。

本格的な発掘は９月28日から10月15日まで行われました。調査では、６枚の堆積層が確認されました。各層から出る遺物が異なり、上のものほど新しいことも分かりました。今日の発掘の基本となる所見が、この調査で得られました。

この直前、京都帝国大学の浜田耕作は、ヨーロッパで正式な層位論を学んで帰国しています。大正６年には、大阪府の国府遺跡出土の「粗石器」が旧石器かどうかを確認するための分層発掘を行っております。しかし薄層であったことから、十分な成果が得られせんでした。

同じころ、古生物学者である東北帝国大学の松本彦七郎は、宮城県内の貝塚の分層発掘を行っています。大正８年に、「地層累重の法則」と「標準化石の概念」を成果として発表しました(「日本先史人類論」『歴史と地理』３巻２号)。ここに「層位学」の理論が完成したのです。

また、松本は同年の「宮戸嶋里浜及び気仙郡獺沢介塚の土器」(『現代の科学』７巻６号)で、「幾何学的紋様期　第四期、大境五層式。／第五期、大境四層式。／第六期、埴瓮斎瓮期」と記し、大境洞窟を基準資料として用いています。その後の発掘調査において、層位と土器との関係が留意され、今日の編年体系の獲得へとつながっています。

なお、今日の研究者で柴田自身の層位学的認識は薄かったとする人もいます。しかし、そうではありません。國学院大学考古学研究室には「柴田常恵　野帳［7］」が保管されております。それを見ると、分層された土層と各層に特有な共伴遺物がメモされており、「大境第５層」への注視や、６枚の堆積層から成ることを記しております。

柴田は大境洞窟調査のあと、10月19日から21日まで氷見市の朝日貝塚を発掘しております。この時、土層を９層に区分し、第６層に後に「朝日式土器」と呼ばれる土器が包含されているのを指摘しております。

大境洞窟遺跡のたたずまい

これらは柴田に明確な層位認識のあったことを示しています。

今日の発掘の基本となる層位学は、大境洞窟と朝日貝塚の発掘によって最初の一歩を踏み出すことができたのです。

朝日貝塚は大正11年３月８日に国の史蹟指定をうけました。ところがその直後に、遺跡の中にあるお寺が焼失してしまいました。再建までの間をぬって、大正13年６月８日から20日まで、やはり柴田常恵が発掘を行っております。この調査で、日本で初めて竪穴住居が確認されました。そこには覆屋がかけられ、今も大切に保存されています。遺構をそのまま残して見せるといった、今日の遺跡整備の原形がここに現れています。この点でも、この調査を高く評価できます。

大正15年５月、東京人類学会(東京帝国大学人類学教室に事務所を置く)によって千葉県市川市の姥山（うばやま）貝塚が発掘され、わが国で初めて縄文時代の竪穴住居が完全な形で発見されたと話題になりました。しかし、朝日貝塚で逸早く竪穴が発見されております。姥山貝塚の調査母体は柴田のいた東大人類学教室です。朝日貝塚での経験が、その後の成果に結びついたものと思われます。

越中考古学の先駆者

柴田常恵が指導した大正13年の朝日貝

朝日貝塚の住居跡の保存棟

日本で最初に発掘された竪穴住居跡（朝日貝塚・保存棟）

塚の発掘に、富山市の早川荘作が参加していました。早川は、県内考古学の先駆者です。早川が採集した屈指の資料は、晩年、富山県埋蔵文化財センターに寄贈されました。貴重な資料が多くあります。早川が活躍したころは、行政が文化財保護法によって、遺跡を保護し発掘するといった時代ではありません。“市井の学者”が自らの足で歩いて遺跡を見つける。それがすべてでした。

柴田は、帰途、早川の家に立ち寄っています。収蔵資料の多さと素晴らしさに驚いています。２年後の大正15年に、早川は、遺跡を紹介した『越中石器時代民族遺跡遺物』（中田書店）を発刊しました。表面採集には、きまってライバルが出現します。遺物が拾える場所を秘密にしたいと思うのが自然な気持ちなのですが、早川は公表しています。

その姿勢には、柴田など当代一流の学者との交流で培われた学問的意識が表れているようです。柴田は早川に多くの影響を与えています。序文を柴田が書いています。柴田が富山考古学界の黎明期に果たした功績は大きいと思います。

早川はその後、『越中史前文化』（中田書店、昭和11年）、『富山県の石器と土器』（清明堂、昭和37年）を相次いで世に出しました。当時、考古学で単著を出すというのは画期的なことでした。地元の、老舗の書店も奮闘しています。当時、入手可能な『富山県の石器と土器』は、考古ボーイたちの必携の書でした。

教員学者と高校生の活躍

戦後まもない昭和24年に富山考古学会が設立されます。早川荘作を会長として、湊晨、林夫門、森秀雄、栗山邦二、佐渡忠作、海老江久良など昭和の考古学を支えた主役が大勢参加しました。

余談ですが、機関誌『大境』第１号（昭和26年）の名簿に、いま東京で演出家・作家として活躍中の久世光彦さんの名前がみえます〔平成18年３月２日、70歳で死去〕。「寺内貫太郎一家」の演出や香西かおりの「無言坂」の作詞、小説『卑弥呼』などがあります。当時、富山高等学校の生徒でした。過日、知人を介して久世さんにお聞きしましたところ、覚えておられませんでしたが…。

教員をしていた森秀雄は、昭和26年に『大昔の富山県　日本の大昔』（清明堂）を発刊し、「日本の歴史を、新しい眼で見なおさなければならない」と熱く抱負を記しています。神話中心の歴史ではなく、考古資料から歴史を語ろうといった意欲作です。中学生にも分かるやさしい文体で専門的な内容を説いています。優れた好著で、今日でも類書を見ません。

縄文研究の第一人者である富山考古学会の小島俊彰会長は、土器の型式や編年で「つまづいた時に原点に戻って読み直すんですよ」（『富山市考古資料館紀要』第19号、1999年）といっています。今でも縄文研究にとって必読の書です。

森が、上市町の白萩中学校教諭をしていた時、運動場の整地で出た石片を採集していた。昭和30年11月７日に遺跡を訪れた慶應義塾大学の江坂輝弥がそれを見て「旧石器」と鑑定しました。県内最初の旧石器時代遺跡（眼目新丸山遺跡）がここに発見されたのです。

日本で最初の旧石器時代遺跡は、昭和24年、相沢忠洋によって群馬県の岩宿遺跡で発見されました。その６年後に、富山県でも旧石器の存在が知られたのです。

過日、私は採集された１点の石片に「S 23. 6 .30」と注記があるのに気づきました。昭和23年６月30日の採集で、岩宿発見の前年のことです。生前の森に話したら「片田舎にいて見つけたものだから、専門でないものだから」と残念がっておられた。日本の旧石器発見前史の一例として、ここに紹介しました。

その頃の発掘は、高等学校の歴史教諭に指導された生徒が主体となっていました。主な報告書に、小杉高等学校地歴班『串田新遺跡調査報告書』昭和27年。氷見高等学校歴史クラブ『富山県氷見地方　考古学遺跡と遺物』昭和39年。高岡工芸高等学校地理歴史クラブ『勝木原（のでわら）遺跡Ⅰ』昭和42年などがあります。

ほかに富山中部高校、富山高校、上市高校、滑川高校、高岡第一高校、魚津西部中学校などがクラブとして盛んに発掘に参加しています。現在、考古学で活躍している人のなかには、クラブ活動出身の方も大勢います。

今のような行政中心の発掘が行われるようになったのは昭和44年以降です。その年、富山県教育委員会社会教育課に専門職員が１名採用されました。開発の波も押し寄せてきました。北陸自動車道の敷設に伴い、昭和45から47年まで小杉町上野（うわの）遺跡が発掘されました。大規模発掘、遺跡の全面発掘、費用の原因者負担、ベルトコンベアーの使用、専属作業員の雇用などは、それまでの学生や生徒参加による発掘風景を一変しました。今日の遺跡調査の出発点がここにあります。

おわりに

昭和40年代の中頃以降、文化財保護法の整備や地方自治体への専門職員の採用が行われ、江上Ａ遺跡や境Ａ遺跡、桜町遺跡、柳田布尾山（やないだぬのおやま）古墳など重要遺跡の発掘が行われてきました。それらの成果が、開催中の「発掘された日本列島2005　地域展」に一堂に展示されております。

ここでお話したのは、今日に至るまでの背景史の一端でしかありませんが、観覧のご参考になれば幸いです。

（2005年10月16日の特別展記念講演から）

埋文
あらかると

中世城館遺跡総合調査を終えて

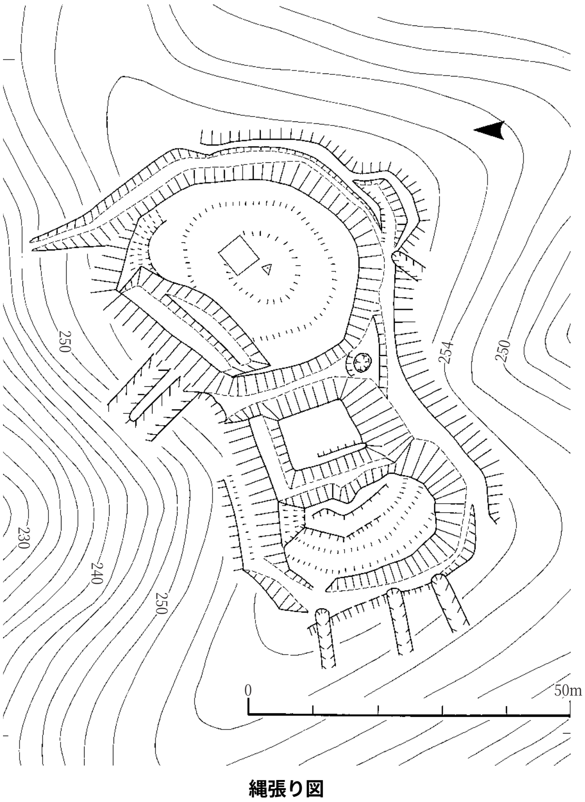
県内の中世城館跡の数が判明

平成12年度から６年をかけて実施してきた「富山県中世城館遺跡総合調査」がようやく終わりを迎えました。

平成12年度に約420件の城館跡や関連する地名をリストアップしました。平成13年度から実施した現地調査で約300件の中世城館を確認することができました。420件が300件なってしまったのは、新たに発見したものもありましたが、名前は違えども実際は同一のものであったり、自然地形や畑跡・植林跡を誤認していたものが数多くあったりしたためです。

縄張り調査

古文書や絵図、地名や伝承の調査のほか、「縄張り図」とよばれる図面を作りました。「なわばり」を広辞苑で引くと「縄を張って境界を定めること。建築の敷地に縄を張って建物の位置を定めること。」とあります。城や館を築くとき、縄を張って曲輪（くるわ）や堀や土塁の場所を決めました。縄張り図は残っている地形から、それらを読み取って図面にしたものです。そこからは、どのように城を守ろうとしたか、どんな目的で築いたかなど、当時の人々の思いや技術を読み取ることができます。



縄張り図

思い返せば・・・

縄張り図を作るため毎年春から初冬まで山に分け入りました。日誌を読み返すと、記憶があれこれ蘇（よみがえ）ります。

こんなことがありました

重い機材をもって登ること30分あまり、やっと城に到着した。しかし、作業を始めてまもなく。みるみる雲が襲来してきたと思ったら・・・。ずぶ濡れで、泣く泣く撤収したこともありました。

真夏の調査は、暑さや毒虫もさることながら生い茂った草木との戦いでした。鎌や鉈（なた）を手に熊笹やイバラ・蔓（つる）草などと格闘し、切株や倒木に脛（すね）を打ちつけ、服も体もボロボロ。伐採に丸３日、縄張り調査は１日足らずといったこともありました。まさに忍耐と持久力の勝負でした。

こんなことを感じながら

調査のため城内を移動していると、城の防御機能を実感させられました。大規模な堀や高い切岸に足がすくんだことや斜面を滑落したことも一度や二度ではありませんでした。鎧（よろい）や具足を着けての移動はさらに至難の業だったことでしょう。

曲輪や堀や土塁に屈曲を設けたり、土塁を食い違いにしたり、城館はいたる所に死角があります。攻城戦の際には、城兵がそこに潜んでいたのです。私たちは、飛び出してきたカモシカに驚かされ、熊がいるかも、と怯（おび）えていました。

堀底や切岸の下に立ち高い曲輪から見下ろされると、威圧感に絶望的な気分になったことを思い出します。曲輪の縁に柵や塀がめぐり、城兵が目を光らせていた当時はもっと威圧感があったはずです。やはり戦いの施設なのだと感じました。

調査風景

でも、これがあったから

調査中は、ひたすら我慢と忍耐が多かったのですが、素晴らしい景色を眺めながら食べる弁当は最高でした。聞こえてくる自然の音は幸せな気分にしてくれ、四季の移ろいも肌で感じることもできました。野生動植物との出会いも気分を和ませてくれました。ときには、お会いしたくない面々との遭遇もありましたが。

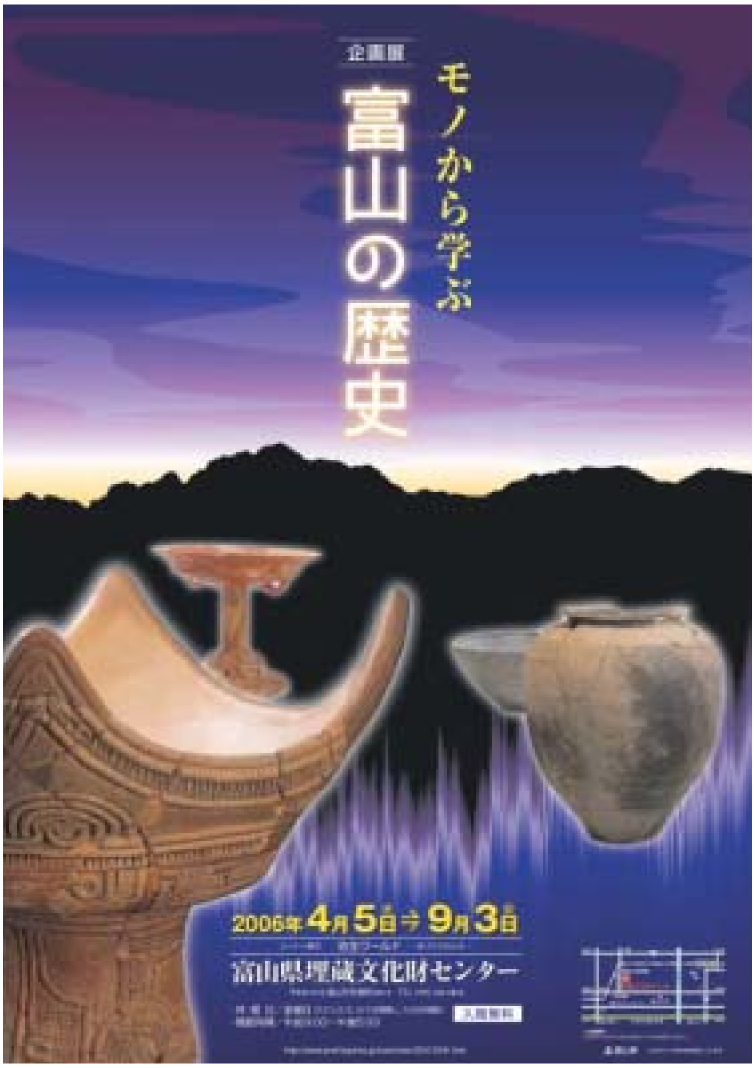
城館を体感する

調査の成果をまとめた『富山県中世城館遺跡総合調査報告書』がもうすぐできあがります。ちょっと覗（のぞ）いてみてください。きっとお住まいの近くにも城館跡が見つかると思います。中には手軽に訪れ、散策できるものもあります。城館跡は、“地域にそれがある”ということに大きな価値があるのです。中世城館に一度出かけてみて、見て、感じて、体験してはいかがでしょうか。

（主任　越前　慶祐）

Center Flash

催しガイド2006



平成18年度企画展

「モノから学ぶ富山の歴史」

　私たちのふるさと、富山。この大地に刻まれた歴史を出土したモノからひも解きます。いにしえから連綿と続く富山の歴史をいっしょにたどってみませんか。

- ●入館無料
- ●会　　期：４月５日（水）～９月３日（日）
- ●開館時間：９時～17時
- ●休 館 日：金曜日
  （祝日のときは、翌週最初の平日）

県民考古学講座

「楽しく、分かりやすく」をモットーにした県民考古学講座。今年も多彩な講師陣をそろえ、考古学のエキスを皆さんにお届けします。６月４日(日)を皮切りに、年６回行います。詳細は４月中旬からセンターの窓口やホームページでお知らせします。

（県民カレッジ連携講座）

考古学キッズ

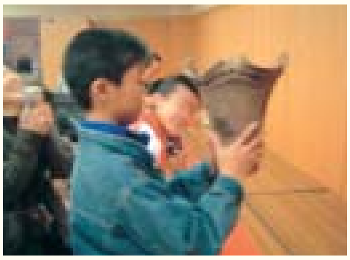
　あなたもプチ考古学者になってみませんか。学校では学べない考古体験ができます。６、７月の土曜日(月２回)に行います。対象は小学校５・６年生と中学１年生です。詳しくは４月下旬にホームページや学校に配布する案内を見てください。

ふるさと考古学教室

　親子で古代体験をしませんか。きっと思い出に残るひと時となるでしょう。夏休みに４回、秋に３回行います。対象は小学校４・５・６年生とその保護者、中学１年生です。また、学校の先生や児童クラブなどの指導者を対象とした教室も開きます。募集要項は、６月に県内小・中学校に配布します。

出前授業　県内、どこの学校へでも出向きます

「一万年前の人が作った石器にさわってる！」「土器って、意外にざらざらしてる！」
ホンモノに触れるのはもちろん、勾玉づくりや火おこしなど、メニューもたくさん。
詳しくはホームページ、当センター(TEL:076-434-2814)まで。



行ってこられよ　—《24》

今度の休日、ちょっと出かけてみませんか。

魚津歴史民俗博物館　　魚津市小川寺

　魚津市郊外の天神山中腹に博物館はあります。昭和48年に開館した歴史民俗資料館をはじめ、吉田記念郷土館、旧沢崎家住宅があり、これらを総称して魚津歴史民俗博物館と呼んでいます。

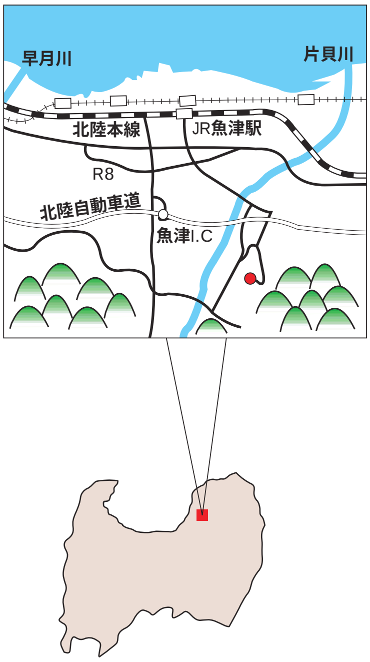
　郷土館では、桜峠遺跡から出た縄文早期の土器や大光寺遺跡の火炎土器などの考古資料、加賀藩関係の歴史資料を見ることができます。

　春の陽気を背に、天神山を散策してみませんか。

　ＴＥＬ：0765－31－7220(資料館)、7045(郷土館)

　開館日：４月１日～11月30日(開館期間中は無休)

　開館時間：９時～17時　　入館無料



- 天神山の山頂には、戦国時代に築かれた天神山城の本丸跡や土塁があります。
- 魚津は蜃気楼が有名。４月から６月に幻想的な姿が見えるかも…。
- ＪＲ北陸本線魚津駅から車で15分。北陸自動車道魚津I.Cからは車で10分。

編集を終えて

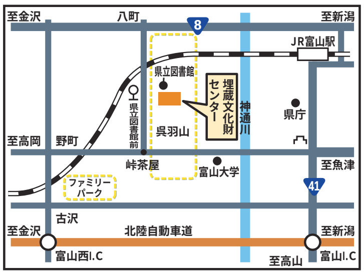
　厳しかった冬もようやく終わり、雪の下で春を待ちこがれていたチューリップたちが一斉に芽吹きはじめました。春は望と出会いの季節。

　気持ちを新たにして、皆様をお待ちしております。(今)

富山県埋蔵文化財センターニュース「埋文とやま」vol.94

平成18年3月20日発行　編集／富山県埋蔵文化財センター　〒930-0115　富山市茶屋町206-3　TEL076-434-2814

URL http://www.pref.toyama.jp/branches/3041/3041.htm　E-mail maizobunka@pref.toyama.lg.jp



再生紙を利用しています

富山県